第一部　講演6

うつ症状と身体症状に半夏白朮天麻湯が著効した症例

柳　受良 先生

ゆうメンタルクリニック

1989年　韓国梨花女子大学 政治外交学科 卒業
1991年　同大学 政治外交学科大学院 修士取得
　　日本政府国費奨学生として来日
1997年　東京大学大学院 総合文化研究科 博士課程単位取得
2009年　鹿児島大学 医学部 卒業
　　山梨県甲府共立病院、熊本県菊池病院、佐賀県肥前精神医療センター 勤務
2015年　ゆうメンタルクリニック 開業
2018年　圓光大学校大学院 漢方医学科 博士 Ph.D.

はじめに

うつ病の疑いで当院を受診する患者は多い。主訴として頭痛、めまい、ふらつき、不眠などの身体症状および抑うつ、不安、意欲低下などの精神症状を訴えるが、このような症状に対しては、抗うつ薬や抗不安薬の投与だけでは治療に難渋するケースが多い。

そこで、頭痛とめまい、ふらつきのため脳神経外科、神経内科、耳鼻咽喉科における治療でも症状が改善しなかったが、当院にて処方した半夏白朮天麻湯が奏効した症例を供覧する。

症　例

症　例：35歳 女性

主　訴：頭痛、頭重感（鼻の方まで巻き込み、下を向くことができない）、めまい（回転性めまい）、ふらつき、抑うつ、対人不安（ほぼ引きこもり状態）、不眠、朝起きられない、朝方の倦怠感、胃腸虚弱

既往歴・現病歴：**図1**に示す。

所　見：**図2**に示す。初診時は真冬であり、寒くなってからより症状が強くなったとのことであった。本人は自身の症状を更年期障害とうつ病と考えており、できれば漢方薬で治療したいという希望があった。以上の所見から、脾胃虚証と診断した。

経　過

経過を**図3**に示す。X＋2年2月27日の初診時から半夏白朮天麻湯7.5g/日（分3）とアルプラゾラム0.4mg（頓服）を処方した。

4週後にはめまいは改善し、10週後には初診時の症状はほ

図1　既往歴・現病歴

既往歴

突発性難聴、片頭痛、急性腸炎で入院歴あり

現病歴

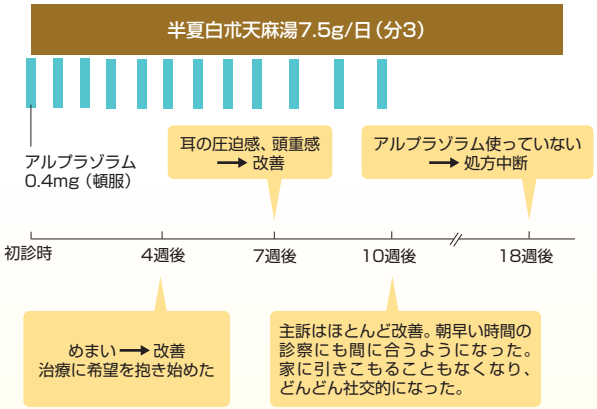
X年6月から急にふらつきが出現、耳鼻咽喉科、脳神経外科では異常なし、内科では自律神経失調症との診断で抗不安薬を処方されたが症状改善なし、そのまま我慢しながら生活を続けた。
1年後、左耳に耳閉感があり耳鼻咽喉科を受診するも突発性難聴と診断され、ステロイド薬を内服し症状は改善した。しかしその後すぐ、ふらつきと回転性めまい、頭重感、頭痛が出現し、脳神経外科の頭部MRI検査を施行されるも異常なし。脳神経外科からはアルプラゾラム0.4mg、耳鼻咽喉科からは補中益気湯を処方され内服したが、症状は改善しなかった。
初診時「娘の卒園、入学式の準備もあり一日も早く普通の生活がしたいです」と本人より希望があった。

図2　所見

所　見

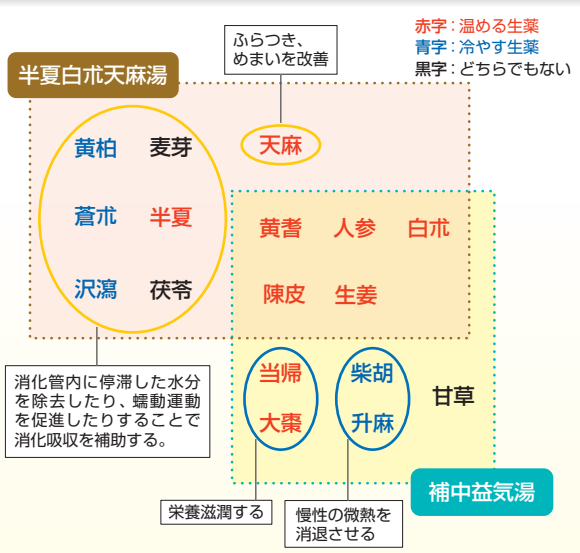
体格：長身、やせ型、小声（湿性）、色白（蒼白）
舌診：淡紅、薄白苔
脈診：沈遅、無力、手足は冷え、室内でもたくさんの服を着込んでいた。
腹診：柔らかく、無力、冷え、心下部に振水音が認められる。
診断：脾胃虚証

図3 臨床経過



その後は1回/月のペースで受診が続き、X+2年12月20日以降は2ヵ月おきの受診となっている。
本人はこの半夏白朮天麻湯による治療談を実名でどこかに投稿したいと言っている。

図4 半夏白朮天麻湯は補中益気湯の変方



ぼ改善した。18週後にはアルプラゾラムも中断でき、その後1回/月のペースで受診を継続し、X+2年12月20日以降は2ヵ月おきの受診となり、現在は治療を終了している。

半夏白朮天麻湯と補中益気湯

補中益気湯と半夏白朮天麻湯の構成生薬を**図4**に示す。半夏白朮天麻湯に含まれる天麻の働きにより、ふらつきやめまいなどの頭部症状が改善されたものと思われる。

考　察

本症例のような患者は、秋口になると当初はうつ病の疑いで来院することが多い。主訴は頭痛、めまい、ふらつき、不眠などの身体症状と、抑うつ、不安、意欲低下などの精神症状である。このような患者に漢方医学的な診察を進めていくと、冷え、慢性的な胃腸虚弱、食欲低下などの隠れた症状が浮かび上がる。

またこれらの患者は心療内科を受診する前に、脳神経外科、耳鼻咽喉科、内科などでさまざまな検査を受け、ほぼ原因不明もしくは心因性身体症状、更年期障害、自律神経失調症の診断で長期にわたって諸症状に苦しんでおり、そこから抑うつ、意欲低下などの精神症状が二次的に出現する場合がほとんどである。患者は胃腸虚弱、身体の冷えについては自覚が乏しく、一つ一つ問診と触診、舌診などを行わなければ、精神科・心療内科の初診患者は自ら訴えることはほとんどない。

心療内科、精神科領域では、患者の訴える精神症状だけではなく身体症状に対しても漢方医学的な診察とアセスメントを行うことが重要である。本症例は、半夏白朮天麻湯が患者の身体症状と精神症状の双方に改善をもたらし、まさに心身一如という言葉の意味を経験させてくれたといえる。

Discussion

木村：ご紹介いただいた症例は、補中益気湯が無効で半夏白朮天麻湯が有効でした。先生はこの点について、どのようにお考えですか。

柳：半夏白朮天麻湯に含まれる天麻が、頭痛やめまいなどの頭部症状の改善に寄与したと考えています。

木村：ご講演の中でも指摘されていましたが、元来胃腸虚弱や冷えがある場合でも、患者さん自身が認識せずに訴えないことがあり、本当の証を診断しにくいことがあるかと思います。先生は、限られた時間の中でどのようなことに注意して診察されていますか。

柳：消化器症状と冷えなどに対しては、「油っこいものを食べられますか」「牛乳を飲みますか」というように詳細な問診を行い、足などを触診して冷えの有無を確認しています。

木村：患者さん自身が油物などを摂らないように気をつけているので、「胃もたれがない」と答えている場合もありますね。